

慢性疼痛患者に対する復職支援用心理社会的フラッグシステムの検討
研究分担者 高橋直人 福島県立医科大学医学部疼痛医学講座 教授

研究要旨

慢性疼痛に伴う就労不能や労働生産性低下による多大な社会的コストが大きな問題となっている。復職支援活動の一環として、心理社会的フラッグシステムを活用し、復職支援を行う上でその利点と欠点について考察し、本邦における慢性疼痛患者に対する復職支援用心理社会的フラッグシステムを開発するため、その分担研究者としての役割を担い、その有用性を検証する。

A. 研究目的

慢性疼痛に伴う就労不能、生産性低下により多大な社会的コストが大きな問題となっており、筋骨格系障害、特に腰痛・頸部痛は多大な影響を与える要因として知られている。この研究報告書の申請者は、慢性疼痛患者の復職支援に精力的に取り組んでおり、三次予防マニュアル作成チームの末席を担っている。本研究の目的は、当講座が星総合病院に設置している慢性疼痛センターにおける復職支援の活動の一環として、心理社会的フラッグシステムを活用し復職支援を行う上で、その利点と欠点について考察し、本邦における有用となる慢性疼痛患者に対する復職支援用心理社会的フラッグシステムを開発することである。

B. 研究方法

回復や職場復帰を妨げる心理社会的障害の問題を分類するために心理社会的フラッグシステムを用いる。フラッグは3つの領域、すなわち1.本人自体の問題をイエローフラッグ、2.職場関連の問題をブルーフラッグ、3.取り巻く社会環境の問題をブラックフラッグに分類する。就労復帰するための障害となっている問題を特定し、就労に向けた計画を立てるための指標となるシステムを開発し、その有用性を検証する。

(倫理面への配慮)

調査研究を行うことについては、福島県立医科大学及び星総合病院の倫理委員会の承認を得て行った。

C. 研究結果

現時点で提示されている心理社会的フラッグシステムを用いて、実際に休業もしくは失職している慢性疼痛患者に使用し、現時点での就労に障害となっている問題点を検討する作業をし、このフラッグシステムの妥当性および有用性を評価し検証した。数例に対して検証したが、慢性疼痛患者やその周りの就労に至るまでの問題点の整理やまとめる作業に関してはある程度有用な手段であることが判明した。

D. 考察

これまでの検証では、休職あるいは失職した慢性疼痛患者自身やその周辺での社会的な問題点の整理には、我々の開発した復職支援用心理社会的フラッグシステムは一定の有用性があることが判明した。しかし、まだまだ改良の余地があること、また、そのように問題点が整理されたとして、その問題解決にはどのように対峙していくか、すなわち医療従事者や企業あるいは社会全体での取り組みをどのような方向性を持って、アブセンティーズムやプレゼンティーズムなどの問題への解決にどのようにつなげて

いくつかは今後の課題であると考えている。

E. 結論

本年が最終年度であるが、現時点で提示されている心理社会的フラッグシステムを、今後とも試行錯誤の上よりよいシステム開発を目指していく必要がある。

F. 健康危険情報

分担研究報告書のため記入せず

G. 研究発表

1. 論文発表
現時点ではなし
2. 学会発表
現時点ではなし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得
2. 実用新案登
3. その他
いずれもなし